

論説 「愛犬家が犬の虐待者となるとき」

子供のための伝承童謡があって、それはこんな感じで始まります。

「年を取った女が靴の中に住んでいた。子供がたくさんいて、どうしたら良いのか分からなかった。」

6年前、奈良県の天理市に手に負えないほどたくさんの犬を飼っている年配の男性がいました。男性が大好きなことを知っていた人々は、家に現われては要らない犬を捨てていきましたが、一匹たりとも男性が受け入れないことはありませんでした。月日が経つうちに、男性は所持金を使い果たし、健康も悪化して、杖をついてびっこをひきながら歩くようになりました。家は「地獄」と化しました。病気で栄養失調で健康をそこねた犬は、一匹一匹と死んでいきました。ビニール袋に詰められて積み重ねられた犬の死体が、徐々に悪魔的な山となり、生きている犬は死体の上で生活することを余儀なくされました。

奈良県が問題に取り組み始めたのも、アークによって激しい国際的なキャンペーンが始められてからでした。県はすべての犬を近所の新しく建てられた施設に移動させ、24時間態勢で介護した保健所の獣医師の技能と努力の結果、6ヵ月で犬たちの健康は回復し、リハビリをして、新しい家を見つけることができました。けれども男性のすぐ近所には、年配の女性が、やはり日増しに荒廃してゆく場所に犬を飼っていたのです。男性と違って、この女性は犬を手放すことを拒みました。この両者にある違いは、男性のところの犬たちは家に持ち込まれたために増えていったのに対して、女性の家の犬はどれも去勢/避妊手術を受けていなかったために、近親繁殖を行って増えていったことと、無責任な飼い主がこの女性の近辺に捨てて行く、といったことが繰り返されたからです。時が経つと、犬の数は変わなくなりました。病気で死んでいく犬に取って代わって、小犬が生まれていったからです。

私達アークの者が7月2日に女性の家を訪れた時に見た状況は、本当にぞっとするようなもので、生き物に対するおそろしい無関心と虐待の問題です。けれども女性は75歳になり、身を寄せる場も、去勢/避妊手術を施したり病院に行かせるお金もないうえに、犬たちを保健所に手渡しして殺すのには忍びないので、まったく手も足もでない状態なのです。この女性は、動物好きで通っていますが、増えてゆく数に圧倒されて対処しきれなくなり、地獄のようなおぞましい状態で動物を飼うことになる収集家の典型です。しかしながら責められるべきは、この年を取った女性でなく、日本の社会制度です。法律は欠如し、役人は無関心で問題に係わることへの躊躇があります。また動物虐待とはどういったことなのかを明らかにし、状況が手に負えなくなる前に早めに対応することが必要なのです。何匹かの犬はおそろしい皮膚の病気によって衰弱して死ぬまでに、ほんの少しの時間しか残されていません。緊急に行動をとることが必要です。

アークは次のような解決策を提案します

奈良県は別の（汚れていない）土地ときちんとした施設をこの女性と犬たちの双方に提供すること。

犬たちは現在いる場所から少数ごとに奈良の動物病院へ移し、まず治療を受け、蚤や寄生虫を除去して皮膚病を直し、それから去勢/避妊手術を受けて新しい施設に連れて行くこと。

その施設が定期的に検査を受け、犬たちの数が一定であれば、この女性は犬を手放さなくてよいと考えます。

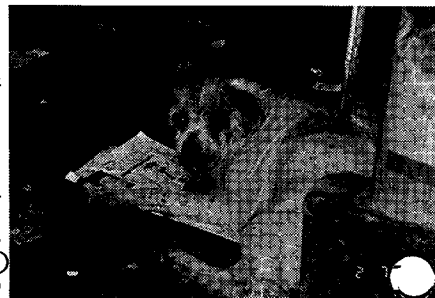
この解決策は（1）女性がこの案に同意するかということと、（2）奈良県が援助する心構えがあるかどうかにかかっている

のです。

アークは前回の事件と同じように、県が迅速な処置を取り、県が本当に動物愛護の精神を持っているのだということを、海外や日本や海外の双方にいる動物愛護家に対して示すことを期待して、すでに奈良県に申し入れをしました。

それからのアークの動き

「6年前の事件と違い、今回は社会性がなく、個人的な問題なので行政としてはどうすることも出来ない」というのが奈良県の答えでした。確かに個人の所有物（日本では動物は「物」として扱われます）に対して行政が手を貸すというのは難しい問題であるかも知れません。しかし、アークが調査に行った後にも、その女性の所に捨てに来る人は後を断ちません。愛犬家であればあるほど、そういった不幸な子たちを保健所に通報し、処分してもらうということは困難なことです。ある意味で彼女も、モラルの欠けた社会の被害者であると言えるでしょう。



現在アークでは深刻な人手不足に悩まされていることは以前にもお伝えしましたが、そういった意味でもアークが全面的にバックアップをするということは不可能です。しかしこういった環境下に置かれている犬達がいる以上、できる限りの協力をして行きたいと考えております。幸いにも、その女性に「避妊・去勢の実施」「病気の治療」「里親出し」ということについて了解をもらうことが出来ました。（現在の日本の動物保護法では、どんなに劣悪な環境であっても、所有者の了解がなければ何もすることが出来ません）現在、ボランティアの獣医師などの協力により、皮膚病の治療、虫下し、フィラリアの投薬などと、病原菌に汚染された土壌を改善する為の消毒・清掃などが、同時進行で行われています。先日新たに捨てられていた3匹の子犬は、大阪のボランティアの協力で見つけることが出来ました。

アークの見解

このように、捨てられた犬達に対して「かわいそう」という同情心から始まったことであっても、現実には彼等が置かれている状況は、地獄そのものです。実際に棒で殴ったり、蹴ったりするわけではありませんが、自分の飼育能力の限界や、現在犬達が置かれている状況を放置している「無知」という虐待を行っていると言えます。本来ならば彼女自身の力で何とか改善を試みなければならないのですが、実際問題ここまで数が膨れ上がってしまった以上、個人の力だけではどうすることも出来ません。今のところ行政はこれといった動きを見せていませんが、現場の犬達は日々あのような劣悪な環境の中で、生活し続けているのです。今後とも奈良県が改善の動きを見せなければ、民間のボランティア団体が力をあわせて解決して行かなくてはなりません。四十数頭の犬達の治療費、避妊・去勢の手術代、フィラリアなどの薬代など、これから莫大な費用が必要になります。こういったことは、今の日本では珍しい事ではありません。実際に動物を保護し、里親探しをするといった活動の他に、このような飼い主に対して、指導と環境改善の手助けをすることも、これからの動物保護の活動に必要なことでしょう。